

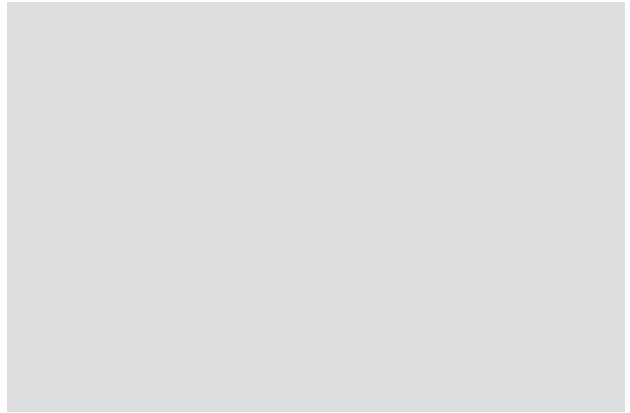
終える命、

つなぐいのち

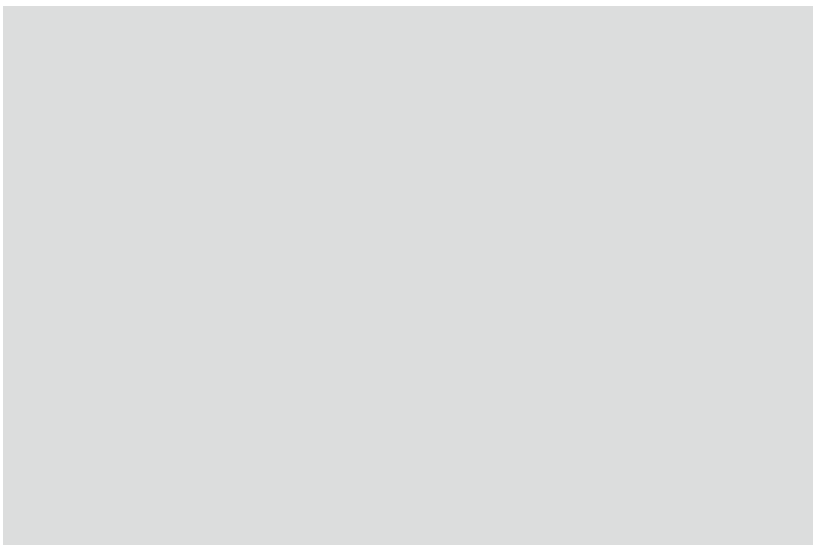
國森
康弘

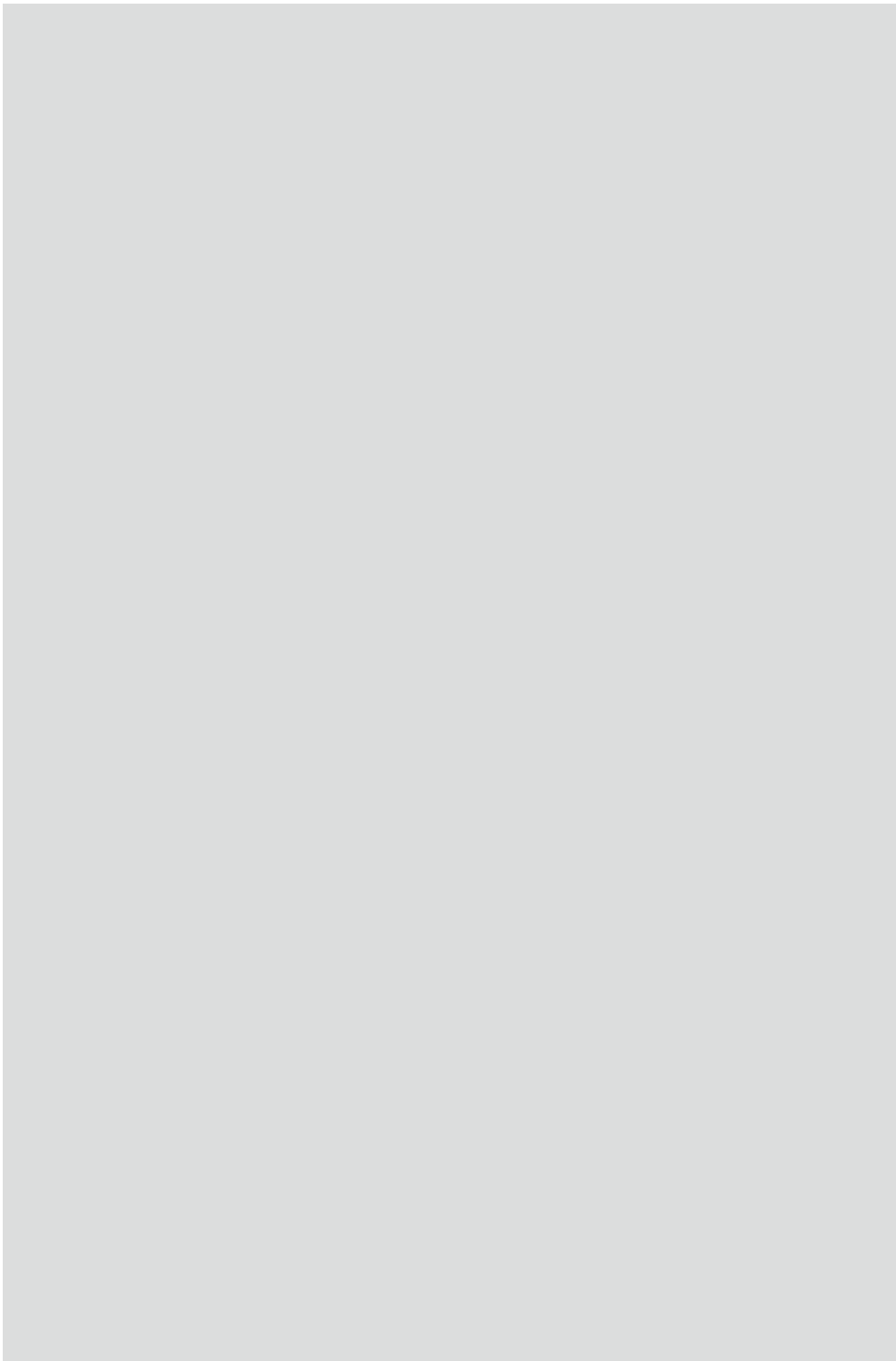
第11回 復興担い未来創る子どもたち

※本連載は、本文のみ無料でお読みいただけます。
写真は、冊子版でのみご覧いただけます。



人々が
「久しぶりに赤ちゃんの声を聞いた」
と目を潤ませた。





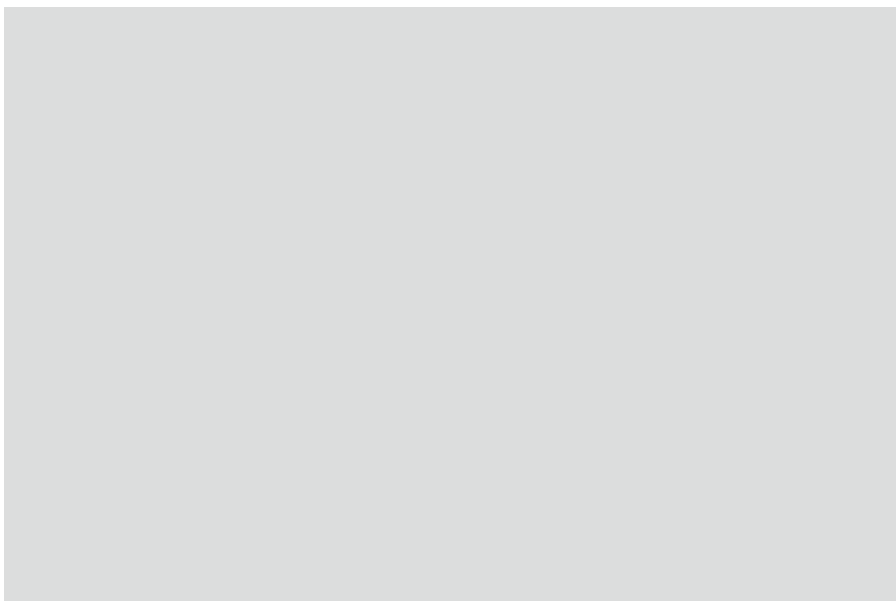
7

つの新生児用ベッドから、競うように泣き声が上がる。一人ひとり、目鼻立ちはおもしろん、声の響きも、身のよじらせ方も、顔の赤らみ具合も違う。

「この子たちが町の復興を担い、未来を創る。いくら自分が疲れていても、産声を聴くたびにやりがいを感じます」。南相馬市立総合病院の安部宏医師は、目を細める。実家は放射線量が高くて暮らせない地区にある。自らも被災し避難生活を送りながら、同病院唯一の産科医として勤めてきた。震災で市内の産科は大半が閉院し、現在は同病院のほか、クリニック1軒のみ。月に2日程しか家族との休日を過ごせないが、「この地で市民の出産、育児ができないと町が消えてしまう」との危機感から自らを奮い立たせる。

原発事故によって、子どもの半数が町を出たまま。出産数も激減した。「家や田畑、墓が流されたのも辛いが、孫らに会えないのが何より苦しい」と、仮設暮らしの高齢者たちが嘆く。身内や知人を亡くし、代々受け継いだ家や田畑や墓を失い、家族は散り散りに……。『いのち』をつなぐ営みが難しくなっている。

放射能汚染は不安をかき立てる。被災生活の苦労だけでなく農産物、特産品の実害および風評被害や、出



身地による結婚差別がさらに住民を苦しめている。

この世界に、「100%安全」はどこにもあり得ないだろう。安全と危険を天秤にかけながら、何らかの選択を重ねて誰もが生きている。

悩み抜いて、南相馬からの避難を決めた人、あるいは、ここでの生活継続を決めた人。両者の抱える苦しみは、そもそも同源であり、その質は同じともいえる。経験なき者が軽々しく意見や批判をできるものではない。個々の覚悟ある判断は、尊重されるべきなのだろう。同時に、「絶対安全」があり得ない以上、事故や事件、災害によって壊滅的な被害をもたらし得る原発には頼らずに、「エネルギー」「食」、そして「ケア」の地域ごとの自給自足率を上げていく「循環型社会」をめざしたいと筆者は思う。

東日本大震災の発災から1年数か月経って、ようやく同病院に産声が響いた。雅（みやび）ちゃんという女の子。他のさまざまな診療科の待合室では人々が「久しぶりに赤ちゃんの声を聴いた」と目を潤ませた。市全体の出生数は発災前の数分の一に減っているものの、雅ちゃんを第1号に、600人を超える赤ちゃんがこの病院で産まれている。（撮影は2011～14年）

くにもりやすひろ●写真家。イラク戦争を機に新聞社から独立し、紛争地や貧困地域などの現実を伝えてきた。2008年から日本の「在宅看取り」の現場を撮り始める。写真絵本『いのちつぐ「みとりびと」』シリーズ（農文協）ほか。